学内広報

2019.12.19 no.1529

瞳の先には
安田講堂が!
→p2

座談会抄録 **女子2割の壁を学生と考える**

三段跳びで全国2位の医学部生に聞く

志ある卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

大学と同じ問題意識で活動している学生有志との座談会抄録

「女子2割の壁」を学生と考える

14.4→15.2→15.9→17.1→17.2→17.3→17.7→17.5→17.7→18.3→18.9→19.3→19.5→19.4

※1 「東大の女子率が低いうちはこの国はいつまでたっても変わらない」「運命が身近にあるとは限らない」「何かを変えたかったら真ん中に行かなくちゃ」「“卓越”とは磨き上げたあなたの“普通”」というポスターシリーズは、本学キャッチコピー選定の際にも尽力してくれた豊田丈典さんと藤本大生さんによるもの。モデルを務めたのは、豊田さんの後輩にあたる少林寺拳法部の皆さんです。「母校訪問した時に見ました。洗練されていてかっこいいです」(武さん)、「初めて見ました。重たくなくてお洒落な感じ」(徳永さん)、「あまり女子女子してないから男子にも届きそうですね」(山田さん)。

※2 高大接続研究開発センターによる「高校生・受験生が東京大学をもっと知るためのサイト」。2018年10月からカジュアルに幅広く東大情報を紹介しています。https://kimino.ct.u-tokyo.ac.jp

高橋 男女共同参画室では、2007年から夏に女子高生向けの説明会を開催していますが、最近は秋にも開催しています。新しく女子高校生向けのメッセージ・ポスター※1も作成して800校に配りました。「キミの東大」※2の女子版にあたる情報ページ※3も始めました。大学としていろいろ試みてきましたが、残念ながら比率が変わる兆しは見えません。学生の側ではどんなことをやっているのか、皆さんの活動を教えてください。

入学式祝辞を機に女子２割特集を企画

徳永 biscUiT（ビスケット）というサークルで年2回刊のフリーペーパー※4を編集しています。東大のマイノリティである女子の居場所になりたい、女友達と話しているような雑誌を作ろう、という趣旨で2011年から活動してきました。今春、入学式の上野千鶴子先生の祝辞で女子2割の壁への関心が高まっていたので、女子学生の立場からこの問題を考えたいと思って9月の号で特集を組みました。周りに議論の輪を広げることができたようでよかったです。

高橋 この座談会もその一つですね。徳永さんがbiscUiTに入ったのはどうして？

徳永 私自身、東大内で女友達を増やすのは難しいなと感じていました。クラスの女子は28人中5人でしたから、何もしなければ4人しか女友達ができないんですよ。1年の秋にbiscUiTを知り、ここなら、と思いました。

山田 僕は東大女子キャン※5の代表をやっています。東大の男女比率を改善するため、東大女子の魅力発信をテーマに、女子高生向けオリエンテーションツアー、SNS発信、イベントなどを行うサークルです。一昨年には、47都道府県出身の東大女子インタビューを実施。今年の駒場祭では、卒業生を6人呼んで「東大女子に聞く！大学選択」をテーマに講演会・座談会を行いました。高校生はもちろん、その親御さんの参加も多かったですね。高校生が東大に行きたいと言っても保護者や高校の先生に止められると難しいですから、周りの大人の考えが変わらないと東大女子の増加にはつながらないと思います。ちなみに女子キャンメンバーの男女比は4：6ぐらいです。

高橋 biscUiTには男子は入れない？

徳永 はい。「東大女子が贈るフリーペーパー」なんです。2号前までは「東大女子のためのフリーペーパー」でしたが、男子にも女子のことを知ってほしいと考えて変えました。男子にも面白い媒体だけど「東大女子のための」だと手に取りにくいという意見が読者アンケートに寄せられていたんです。

女子２割の壁問題をフリーペーパーで特集
ビスケット代表 文科二類２年 徳永紗彩さん

山田 男子にも目を向けるのはいいですね。たとえば女子2割の問題に女子だけが取り組むのは得策じゃないし、男子も当事者意識を持つべきです。

高橋 女子キャンに入ったのはどうして？

山田 僕の家では父と母が別の姓でした。自分には自然でしたが、大きくなって世間ではそうではないと気づき、結婚して夫

東大新聞などで東大の魅力や課題を発信
男女共同参画室ライター 教養学部３年 武沙佑美さん

東大に初めて女子が入学したのは1946年のこと。19人というごく限られた人数での出発でした。以後、学部学生の女子比率は少しずつ上がってきましたが、20%の壁はなかなか越えられずにいます。2006年に発足した男女共同参画室を中心に大学は様々な取組みを進めてきましたが、一方、学生の側にも同じ問題意識をもとに活動する心強い皆さんがいることをご存じでしょうか。ここでは、中でも注目すべき取組みを見せているお三方をお招きして女子2割の壁をテーマに実施した座談会の模様を、ダイジェストでお届けします。ファシリテーターを務めてくれたのは、男女共同参画室進学促進部会長の高橋美保先生です。

学部学生全体に占める女子の割合の変遷（1994年度以降の「東京大学の概要」より）

→19.1→19.0→18.8→18.7→18.3→18.4→18.7→18.6→19.0→19.4→19.5→19.3→?

の姓にする人が9割以上いることに格差の芽が潜んでいる、と思いながら東大に来て、女子キャンを知りました。夫婦別姓と女子2割は別の問題ですが、背景は似ていると思います。女子には学歴などいらないという通念が残る男性優位の社会であることです。そこが変われば夫婦別性のハードルも下がるし、制度的にも現実的にも男女の偏りがなくなったほうが日本経済の復活にもつながるはずです。

男女共同参画室で進学促進の活動を担当
男女共同参画室進学促進部会長
教育学研究科教授
高橋美保

女子高校生と東大生が実際に接する場を提供
東大女子キャン運営委員会代表
文科三類２年
山田碩人さん

武　私は、男女共同参画室の学生ライターや東大新聞の記者として活動していて、「キミの東大」とも少し関わっています。女子2割の問題に関心があり、何とかしたいと思ってきました。都心の高校の出身ですが、東大に来たときにショックを受けました。私は初日から周りに高校時代の友達がいて、たとえば健康診断に連れ立って行く人もいましたが、地方から来た人はそうではなく、一人。その状況を見て、私のほうが異常かもしれない、と気づいたんです。もう一つは女子の少なさ。教室に女子は私だけということがよくあり、海外に進学した友達と話しても、東大は何かおかしいぞと感じました。両者が重なって、地方出身の女子に注目した感じです。私が東大に入るためにやらないといけなかったことと、地方で育った人やあまり教育熱心じゃない家庭で育った人がやらないといけないことは、違うと思いました。ただ、私は東大に来てほしいというよりは、私の大学に来てほしい。自分が好きな大学だから来てほしい。東大がNo.1だから来てほしいわけではないんです。

「一番」のブランドが壁になる？

高橋　東大は一番だから入ろうという打ち出し方は地方女子の受験に影響するでしょうか。

徳永　私は福岡出身ですが、福岡だと京大志望のほうがずっと多いですね。距離の遠さのほか、東大は一番というブランドが壁になっていると思います。私は一大学として見ていましたが、多くの女子は端から東大が視野に入っていない。自分が目指すような大学ではないという感覚がありました。

高橋　どうして一大学と思えたのかしら。

徳永　高校受験のとき、仲がよかった塾の先生に、このままがんばれば東大にも行けると言われて、そうかと思ったんです。それで東大が視野に入ったんですね。東大に進んだ先輩が一人いて、同じ環境ですごした人が行けるなら自分も行けるかも、と思いました。身近に東大に行く人がいるのは大きいですよね。東京出身の人に東大を選んだ理由を聞いたら、周りの友達が目指していたから、と答える人が多かった。彼らにとっての東大は福岡の人にとっての九大でした。それと近い感覚を地方に拡げられたら、と思います。

高橋　でも徳永さんは東大に来たのよね。

徳永　将来東京で働きたくて、九州より東京の大学のほうがいいかと思ったんです。あと、できるだけ上の大学に、とも思っていました。

※3　男女共同参画室ウェブ内の「Campus Voice スペクトル」では、東大の多様性推進の取組みや活躍する在学生・教員・卒業生の声を学生ライターがレポート。9月3日の記事では武さんが室長の松木則夫理事に直撃インタビューを行っています。https://www.u-tokyo.ac.jp/kyodo-sankaku/ja/campus-voice/campus-voice.html

※4　vol.18の特集は「19.26ー「東大女子2割の壁」を考える」。現役東大生545件、高校3年生431件の回答を集めたアンケート結果のほか、進学校への電話調査結果、江川雅子元理事ほかの有識者の声などで構成した入魂の7ページが話題を呼びました。http://utbiscuit.xxxx.jp

※5　略せずに言えば「女子高校生のための東大オリエンテーションキャンプ」。キャンパスツアー、パネルディスカッション、ワークショップなどで構成した女子高校生のためのオリエンテーションツアーは年に3回ほど実施。中高生のための東大情報サイト「GIRLS BE?」も展開中。http://www.ut-joshicamp.com/

※6　在学女子学生が夏休み等に母校を訪問し、東京大学に入学して良かったことや現在取り組んでいることなどを母校の後輩に伝える活動。武さん・徳永さんも参加したことがあるそうです。

※7　毎年7月に受験志望者向けに発行している「大学案内」の巻頭部分に掲載されているのが、「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」。国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語という各教科別に、本学受験を考えている人に留意してほしいことがまとめられています。https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400095691.pdf

※8　女子比率向上のための施策について現役東大生に訊ねたbiscUiT vol.18のアンケートでは、「東大の女子寮を建設する」に80.0%の人が賛成、6.1%の人が反対でした。「女子学生への家賃3万円補助（住まい支援）」には48.6%の人が賛成し23.1%の人が反対。「入試の合格者に女子枠を設ける」には10.3%の人が賛成し77.8%が反対しました。

※9　「正直女子が少ないことの何が問題かわからない」「別に東大女子を無理に増やす必要も無いように感じられます」など、男女比の偏りを問題視すること自体に疑問を抱く趣旨の意見が12件ありました（biscUiT vol.18のp8より抜粋）。

高橋　一番だから目指した面もあった、と。

徳永　地方のほうが、一番という価値しか知らない人が多い気がします。東京には、たとえば駒場祭に行ったことがある人もけっこういて、一番以外の東大の魅力も知っている。地方だと、東大は一番というイメージしかなくて、自分には無理と思ってしまう。

山田　僕も地方出身ですが、地方女子が東大を目指さない背景には、身近に東大女子がいないことがあります。テレビを通した東大生像じゃなく飾らない普段の姿を知れば目指す気になると思うので、女子キャンは東大女子の身近な姿の発信に重点を置いています。

武　東大を目指すことは東京でも言いにくい面がありますよ。でも先輩に東大生がいるとか、先生が後押ししてくれると、目指そうと思える。ハードルを下げるには周りのサポートが必要で、母校訪問※6は有効です。ただ、その学校出身の東大生が一人しかいないと、神格化されることもありそう。あの人は別と思われて身近に感じられず、逆効果になったり……。

憧れの対象の多様性を広く伝えたい

高橋　「一番」以外の東大の魅力は何だと思いますか？

武　一学生として推したいのは、人ですね。尊敬できる人、刺激をもたらす人の割合が、東大は高いと思います。ちなみに私は、東大の大学案内に載っていた、高校までに学習しておいてほしいことを書いた文章※7を読み、その素晴らしさに惚れて受験したんです。

徳永　地方女子の親としてキャリアの点を考えると、東大が一番じゃない場合が多いと思います。地元の国立大学のほうが安心だったりしますよね。東大でしか描けないキャリアの存在とか、そうした職場で活躍する先輩の姿が伝わると東大志望者が増えるかな、と。

高橋　高校生にはまぶしすぎないかしら？

徳永　輝く先輩に憧れて近づきたいという気持ちはやはり必要だと思うんです。

武　たとえばですが、ドルフィンスイマーになった先輩や、離島で事業を立ち上げた先輩などもいますよね。東大に行くことで様々な道が拓けるはずですから、実はこんなところでもあんなところでも卒業生が活躍している、と伝えることが価値を高めるのでは？

高橋　憧れの対象の多様性ですね。キャリアの幅広さを伝えられるといいかもしれません。

武　授業の幅広さも魅力です。1年生から作曲や能や演劇まで学べる授業が提供されていることはもっと伝えるべきだと思います。

徳永　私は、女子2割の何が問題なのかを、社会的意義からではなく学生の側から伝えたいです。女子比率向上のための施策についてアンケートで聞くと、女子寮の建設が一番求められていました※8。単純に寮が充実していれば地方の子も安心して東京に来ると思います。アンケートでは、なぜ2割じゃだめなのかという意見も見られました※9。平等に行われている入試の結果が2割なのだから別に問題はないという意見です。これはすごく怖いと思います。その結果に至った背景、受験までにある何枚もの壁が意識されてほしいです。

壁の枚数の男女差に男が気づくべき

山田　完全に同意です。突破すべき壁の枚数が男女で違うことに、女子は何枚もの壁を突破して東大に来ていることに、男子学生は気づくべきです。まずは東大内で問題意識を掘り起こし、それを社会全体に広げていけるといいのですが。

武　東大に地方出身や女子の学生を増やす策としては、学生が学外の友達や後輩などに、東大のいいところ、面白いところを話して伝えることも大切だと思います。東大生が東大の魅力を体現するということです。

高橋　教育でその力を高めたいですね。東大がそうすれば、高校や中学にも波及するかも。

武　せっかく身近に東大生がいたとしても、その人が最悪な性格だったら……悪影響は必至ですからね。

高橋　各々の立場で違う特徴を発揮しながら、同じベクトルを持って活動していることがわかって、私は何だかうれしいです。今日の出会いが壁を崩す端緒になるといいですね。

（駒場祭明けの11月25日、教養学部アドミニストレーション棟1階会議室にて）

三段跳びで全国2位!!

陸上運動部女子主将の医学部生に聞く

メダルには天皇賜盃・秩父宮妃杯の刻印が

岐阜県の長良川競技場で9月12日～15日に行われた天皇賜盃第88回日本学生陸上競技対校選手権大会。女子三段跳びに出場した本学陸上運動部の内山咲良（さくら）さんが、見事に準優勝を果たしました。医学部の4年生として日々勉学に励みながら、部の女子主将としての重責も果たしながらの大活躍について、ご本人に話を聞かせてもらいました。

陸上運動部女子主将
医学部4年
内山咲良さん

決勝1本目で13.00mの自己ベストを出した跳躍から、3歩目を踏み切る直前。「三段跳びでは1歩目を強調する人と3歩目を強調する人がいますが、私は後者です」

昨冬から記録がめきめき向上

――出場したのはどういう大会ですか？

「全日本インカレ」と呼ばれる学生陸上界最大の大会です。各種目で定められた標準記録をクリアしないと出られません。私は今回が初出場でした。実は関東インカレに出たのも今年が初めてでしたけど。

――最近になって急に記録が伸びた？

三段跳びを本格的に始めたのは去年の冬で、以前は走り幅跳びが専門でした。高3でインターハイに出ましたが、大学では自己ベストに届かず、停滞感があって。それであまり練習せずに三段跳びの試合に出てみたら、関東インカレの標準記録（11.80m）に迫る記録が出て、そこから力を入れました。3月に11.84mが出て喜んでいたら、GWには12.56mが出てびっくり。これで全日本インカレの標準をクリアしました。

――何がうまくいったんでしょうか。

助走と跳躍がつながり、スピードに乗ったまま跳躍に入れるようになった感じです。三段跳びでは3回も着地があって衝撃が大きく、鍛えていないと「潰れ」ますが、瞬発力につながるプライオメトリクストレーニングを冬にがんばった成果かな、と。

――では結果は想像したとおり？

想像以上です。目標は決勝進出でした。予選は12.50mで全体の6位。決勝の1本目で13mが出て、そのまま2位で終了しました。過去一番の「ホップ・ステップ」と「ジャンプ」が合体した感じ。歴代2位の記録を出した大阪成蹊大の選手には及びませんが、今の自分にできる最大限の跳躍でした。

――練習はいつも駒場グラウンドで？

はい。平日は16時に授業が終わってから駒場に移動して17時から2～3時間。土日は午前から。週5日が基本です。三段跳びの練習は高い負荷をかけないとあまり意味がないので、ビデオを見てフォームを確認しながら、休み休みやっています。

心がきゅっとなる日々が続いて

――学業との両立は大変なんでしょうね。

特にメンタルの管理ですね。重圧で心が折れそうになります。今秋はインカレのほかに京大戦もあり、その翌日には医学部で重要なOSCE（オスキー）という臨床試験もあって……。気持ちがきゅっとなる日々が続きました。

――どうやって乗り越えたんですか？

自分の負担を減らして自己防衛しました。英語論文と日本語訳を照合する仕事と、回転寿司店のバイトをやっているんですが、ヤバいと思ってシフトを入れませんでした。

――陸上競技の好きなところは？

球技は団体競技だから自分だけではどうにもならない部分が大きいですが、陸上は基本的に自分だけ。自分がやったことが結果に直接反映されるところが好きですね。

――東大を選んでくれたのはどうして？

高校の頃、医者になりたいと思いました。しんどい人に寄り添いたくて、漠然と精神科や救命救急に興味を持ちました。当初は別の志望でしたが、センター試験で思ったより点が取れたので前期は東大に変更。合格したので、せっかくだからと東大へ来ました。来てみて感じたのは、周りの人のすごさです。学力だけじゃなく、ボウリングとかAIとか、何かに突出した人が多い。出会ったことのない人たちに会えています。

――精神科を目指す気持ちは今も？

医学部に来てから揺らいでいます。死因を究明する法医学や、臨床でもおもしろそうな科があって。実態を知らないので、5年生で実習に出てから決めたいと思います。

――では、競技のほうでの目標は？

来年の日本選手権で戦うことです。12.70mが現在の標準記録なので出場はできそう。出て満足するのではなく、社会人も含めた全国のトップ選手たちと戦って決勝に残りたいと思っています。

TLPでフラ語を履修。試合前にはEDMを聴き、陸上以外の趣味はYouTube鑑賞だと語る「うっちー」さん

東大陸上運動部のユニフォームはタンクトップ中央の淡青色の長方形が特徴的

左は試合中につけたゼッケン。右は表彰式でつけた栄誉のゼッケン

海と希望の学校 in 三陸

第5回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターを舞台に、大気海洋研究所と社会科学研究所がタッグを組む地域連携プロジェクトがスタートしました。海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の試みです。本学の皆様が楽しむような取り組みの様子をお伝えします。

僕たちは『海と希望』という名の列車に乗るはずだった

北川貴士 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

「海と希望の学校 in 三陸」の今年度の目玉イベントのひとつが、来年2月16日に開催する予定であった「海と希望の学校 on 三鉄」(以下三鉄イベント）でした。これは、三陸鉄道（三鉄）の列車に乗って、車窓から景色を眺め、旬の海の幸を味わいながら、三陸の海を勉強するという企画で、ラグビーワールドカップ2019™日本大会の会場となった釜石市・鵜住居を発着、震災で大きな津波被害を受けた宮古市・田老を折り返しとする行程でした。

ご存知の通り10月の台風19号は、各地に大きな被害をもたらしました。三陸沿岸もその一つで、釜石市ではワールドカップのカナダ対ナミビア戦が中止となりました。沿岸を走る三鉄はとくに大きな被害を受けました※(図1)。今年3月に開通したばかりの三鉄リアス線（釜石〜宮古）への被害は、線路77カ所（線路の路盤流出、土砂流入、のり面崩壊等)、電力信号通信設備16カ所（ケーブル管路流出、信号器具箱浸水等）に及び、復旧の目途が立たない状況となってしまいました（10月16日時点。以下で現状を確認できます。https://www.sanrikutetsudou.com/?p=13530)。そのため、この三鉄イベントも主にリアス線で行うため、やむを得ず延期せざるをえなくなりました。

（図1）台風19号の大雨により路盤が流失し、レールが宙づりとなった三陸鉄道の線路（山田町船越10月16日撮影）

✦✦✦✦

釜石市内では定期的に危機対応研究センター※主催の「危機対応学トーク・イベント」が開催されています。11月16日は、「線路は続くよ：三陸鉄道の危機対応とこれから」というテーマだったのですが、三鉄が台風の被害を受けたということで「三鉄応援イベント」としても行われました（図2)。はじめに、メインゲストの三陸鉄道（株)・中村一郎社長にはリアス線の現状について報告をしていただきました。次に筆者が「海と希望の学校 in 三陸」で行っている活動内容や延期となった三鉄イベントの説明を行いました（図3)。その後のトークでは、参加者から三鉄は単線の気動車でのろのろ運転、時間はかかるけど「待つ」ことで得られる何かがある、といった意見がだされるなど、大いに盛り上がりました。

幸いなことにリアス線は11月28日より一部区間（津軽石―宮古間（9.2km)）で運行が再開されました。また、新年度には全線で再開できる見込みのようで、三鉄イベントも開催できそうです。三鉄から「待つ」ことで得られる新しい鉄道のあり方のようなものをぜひ発信していただけたらと思いますし、我々も三鉄イベントを通してそのお手伝いができるよう、開催にむけて準備したいと思っております。

※Yahooネット募金「令和元年台風19号による三陸鉄道被災への支援募金」(https://donation.yahoo.co.jp/detail/5242001/）など、義援金窓口が設けられています。

※東日本大震災による津波の記憶継承と将来の危機対応を研究するために社会科学研究所と釜石市が開設した協働拠点。

（図2）釜石市情報交流センターで行われた危機対応学トーク・イベント（11月16日)。登壇者は左から玄田有史（社研教授)・中村一郎（三鉄社長)・筆者・中村尚史（社研教授）

（図3）イベント「海と希望の学校 on 三鉄」で使用予定のヘッドマーク

「海と希望の学校 in 三陸」動画を続々公開→ YouTube サイトで 海と希望 と検索！　制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

総長室だより

第25回

～思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長　**五神 真**

新しい渋谷から未来への問いかけを

いま、渋谷が大きく変わろうとしています。11月にオープンした渋谷スクランブルスクエアはその象徴です。その15階に産学交流の新しいプラットフォームとして、SHIBUYA QWS（キューズ）が誕生しました。名称はQuestion with sensibilityの頭文字を繋げたもので、物事の本質を探究し、常に問い続けることが、新しい価値につながる原点になるという思いがこめられています。渋谷のほど近くに駒場キャンパスを擁する東大も参加して、都内5大学と企業16社の提携によって生まれました。11月8日には、オープニング企画の一つとして、隈研吾先生と私が、「地域の未来を拓く知の創発とは？」をテーマに現地で対談を行いました。隈先生はスクランブルスクエアの設計者の一人です。

私は東大入学当初、進学先の選択肢として建築を考えたこともあり、とても楽しく対談できました。建築は人たちが集い、出会うプラットフォームである、大きな施設作りのような巨大プロジェクトに人を惹きつけ巻き込むには、“実験性”が大事……といった、インパクトのある作品を次々世に問うてきた隈先生ならではの話に大いに刺激を受けました。大勢の人々を巻き込むのが重要というのは大学運営にも通じる話です。

とりわけ印象的だったのは、東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場に47都道府県の木材を使ったという話です。同じ杉材でも産地によって木目も色味も手ざわりも全然違うというのです。多様な材料というと、木とプラスチックと鉄が違うことは誰でもわかります。しかし、杉材の微妙な違いを感じるには、日頃から木材をより丁寧に深く見つめていなければわかりません。違いを感じ取るセンシビリティを鍛えておくことが重要なのです。それがあれば、違いを味わい楽しむことができる。これは多様性を尊重することの出発点なのではないかと思いました。そこから新しい価値が生じてくるはずです。

大量生産大量消費の時代には、差異を捨てることがむしろ価値につながっていた面がありました。しかし、今は違います。革新が進むデジタル技術も、社会の様々な差異を丁寧に扱い、尊重するツールとして役立てるべきです。差異を尊重する中で、新しい価値が生まれます。そのためには、物事を漠然と見ているのではなく、違いに対するセンシビリティを意識して磨くことが大切です。それを鍛える場として大学の多様性をいっそう高めることが重要だと感じています。

私も駒場に通っていたころ渋谷に良く足を伸ばしました。次代を担う若者が集う渋谷から、未来社会への協創の問いかけを発信していきましょう。

UTokyo バリアフリー最前線！

第17回

熊谷晋一郎室長が取材原稿で伝える障害研究の現場④

支援室の羅針盤――理念、専門知、実践知

バリアフリー支援室
垣内千尋 准教授
中津真美 特任助教

東京大学にバリアフリー支援室が発足し15年になる。以前の障害者支援は各部局が行っており、支援ノウハウが散逸してしまうという問題があったため、学内全体でノウハウの蓄積と提供を行うべく、支援室が設置された。そして、こうしたノウハウの蓄積や更新を担うのが、支援室の専任教員である垣内氏と中津氏である。

中津氏は、設立時から長く支援室を支えてきた。専門は聴覚障害支援学で、支援室では、文字通訳等の情報保障を中心に、身体障害領域をカバーする。CODA（聴覚障害者の子どもを意味するChildren of Deaf Adultsの略語）としての自身の生い立ちを振り返り、ごく普通の家族だと思っていたのに、周囲から注がれた「がんばってるね」という特別な視線への違和感が、障害者への理解を広めたいという思いにつながったと述べる。「知らないことは分断を生む」という信念のもと、支援実践に加え中津氏はCODAの心理・社会的研究にも取り組んでおり、少しずつだが社会の変化に手ごたえを感じてきているという。

垣内氏は、基礎と臨床の両方に造詣の深い精神科医として、本学でもニーズが増し続けている精神疾患や発達障害の支援を主に担う。支援室は「障害は本人と環境のミスマッチである」という社会モデルの視点に立ち、主に環境側の改変による障害の軽減を目指すが、精神疾患の場合は病状改善の可能性の評価が容易でなく、医学的介入と環境改変のバランスの取り方は時に難しい。さらに、人生のある時期で精神疾患を経験した本人は、新しい自己像、進路や価値観を再構築する課題にも直面する。本人の意思を実現するという基本を踏まえつつ、複数の意思や欲動の葛藤状況そのものに寄り添う支援の重要性を垣内氏は強調する。

両氏は、機会の平等という理念を強調する。その一方で現実には経済面・人材面などの制約があり、要望のすべてが実現するとは限らない。そのような中、実践面で重視するのが配慮決定プロセスの明確化だ。何ができ何ができないのか、できないのはなぜなのか、代替案はあるのかなど、丁寧な対話を重ねる。日々突きつけられる難題を前に支援室が航路を見失わないために、理念、専門知、実践知を担う2人の専任教員の存在は大きい。

バリアフリー支援室　ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第163回

RELAY COLUMN

理学系研究科生物科学専攻
上席係長 畠山良一

毎日がタイトルマッチ!?

このポーズにピンときた方はプロレスファン？

本郷キャンパスの東南の片隅に、ひっそりと建つ生物科学の殿堂理学部2号館。

そのレトロで威厳ある建物のなかで、日々繰り広げられる業務は、学科・専攻の運営に直接間接関わるとあって、さながら毎日がタイトルマッチであります。

総務、人事を中心に、時に施設管理に至るまで、東奔西走、走ります。

今、会議の議事録を作りだしたと思ったら、次の瞬間、水漏れ発生の第一報。いきなりCHAOSの様相であります。

人事の作業を行いつつも、給与関係の問い合わせに四苦八苦。

システム操作を間違えて、制御不能になったなら、自分と機械に「トランキーロ！ 焦んなよ！」。

とは言え、持って生まれた不器用さ故に、時に息切れすることも。そのような時は、先生方や職員、スタッフの方々の助けをお借りして、ツープラトンの攻撃で乗り切ります。

そんな日々のご協力に感謝しつつ、さあ、今日もタイトルマッチのゴングが鳴ったああ！

拙者、私生活では居合を少々

得意ワザ：柳生新陰流・巻き切り！
自分の性格：「のほほん」にして「粗忽」
次回執筆者のご指名：高野稔さん
次回執筆者との関係：学生部時代のプロレス愛好家仲間
次回執筆者の紹介：温厚な中にキラリ切れ味！

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第7回

情報学環特任助教 高嶋朋子

所蔵新聞原紙のデジタル化に着手

情報学環附属社会情報研究資料センターのデジタルアーカイブ・システム「Digital Cultural Heritage」（以下、DCH）は、研究者資料、さまざまな時代のメディアと多岐に渡るデータを扱っております。

2018年にDCHがリニューアルする以前から公開していた、小野秀雄関係資料、外務省関係資料、坪井家関係資料、森恭三コレクションという4資料群の目録データと一部画像は、そのまま継承しております。なかでも、小野秀雄関係資料の小野秀雄コレクションに含まれる災害に関するかわら版は、書籍やテレビ番組などに多く利用されています。他にも、外務省関係資料の第一次世界大戦プロパガンダポスターコレクションには、東京大学学術資産等アーカイブズポータルの電子展示で取り上げられたポスターが含まれていますし、既にどこかで目にされた資料がDCHでも見られる、ということがあるかもしれません。

さらに、所蔵している新聞原紙をデジタル化し、DCHで公開する事業も進行中です。当センターの所蔵原紙は、新聞研究所から引き継いだものを中心に、近代に発行された地方紙や政党紙、業界紙と幅広いものです。例えば、現在公開中の『日本毛織物新報』（所蔵分は1917-1925年）は、紙名の通り毛織物を扱う洋服業界の業界紙です。発行元である日本毛織物新聞社は、国内初の洋服大会といわれる諸大家洋服技術大会（1915年）を主催しており、この時期の業界を牽引する組織であったと推測されます。同紙において興味深いのは、洋服製図の掲載、「洋服技術講話」欄の設置、洋服製作に関する外国語書籍および記事の翻訳など、毎号に最先端の洋服製作技術が紹介されていることです。時には、掲載された製図に対しての批判・意見などが次号で活発に展開される様子も見られ、同紙は、技術習得のための研究資料であり、また意見交換の場でもある画期的なメディアだったといえるでしょう。

日本毛織物新報409号附録大正十四乙丑年略暦

今後も公開データの整備、充実を図って参りますので、ご興味のある資料群にぜひアクセスしてみてください。

Digital Cultural Heritage
dch.iii.u-tokyo.ac.jp/s/dch/

インタープリターズ・バイブル 第149回

情報学環教授
科学技術インタープリター養成部門 廣野喜幸

『なぜだろう、なぜかしら』中学生は中学生編

中学1年生の息子の運動会に行ったとき、中学3年生がやけに大きく見えた。息子が中学3年生になったとき、中学1年生がやけに小さく見えた。10代の成長は著しい。きっと内面も大きく成長しているのだろう。

小学生向け科学読本は学年別に、『なぜだろう、なぜかしら』『理科なぜどうして』『なぜなに理科』等々、10以上のシリーズが刊行されており、柳田理科雄のジュニア空想科学読本シリーズなどもある。版元は対象年齢層を広く「申告」する傾向があり、小中学生から大人までなどと銘打っているが、ちくまプリマー新書や岩波ジュニア新書（中の理系本）は、高校生から大学初年級が読むと裨益するところが多いシリーズだろう。では、中学生向け科学本は、どのような状況にあるのだろうか。

中学生を対象とした書籍自体はけっこう出版されている。『13歳からの論理ノート』『13歳からの法学部入門』『13歳からの日本外交』『13歳からの経済のしくみ・ことば図鑑』『お父さんが教える 13歳からの金融入門』『13歳からのジャーナリスト』『13歳から知っておきたいLGBT+』『13歳からの世界征服』『新 13歳のハローワーク』『14歳の君へ―どう考えどう生きるか』『14歳からの政治入門』『図解でわかる　14歳からの地政学』『14歳からのお金の話』『14歳からの資本主義』。

元気なのは社会科学系のそれである。自然科学系は、宇宙科学者佐治晴夫さんが一連の著作（『14歳のための物理学』『14歳のための宇宙授業』『14歳からの数学』『14歳のための時間論』）を発表されているものの、それを除けばごくわずかしか見当たらない。中学生が読む気になったときには、小学生向けか高校生向けのどちらかを読んでね、あるいは、中高生と一括され、本来高校生に適した書物をあてがっておけばいいだろうといった気配が感じられる。こうした傾向は、高校進学率が高まった1960年前後からはじまったようだ。

成長著しい時期に、同じ本で済ませてしまってよいものだろうか。理科離れが進む中学時代に、それを押しとどめるような、科学に誘う書物が欠落しているのではないか。科学コミュニケーションは異文化コミュニケーションに似ている。認知科学によれば、自然科学の専門家と素人はそもそも発想法が異なる。大きさがないのに質量のある質点など、不自然に感じる方が普通だろう。自然科学に本格的に接し始める中学生時代にこそ、こうした発想ギャップを乗り越えさせてくれるような、『13歳からの自然科学』が求められるように思われてならない。

科学技術インタープリター養成プログラム

蔵出し！文書館 ぶんしょかん

The University of Tokyo Archives

第23回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

弁慶、忠次、お俊も関所で止められる

当館では、明治30年代からの大学の記念アルバムや卒業アルバムを所蔵しています。将来的には画像検索ができるよう、キャプションの情報入力をおこなっていますが、最近入力したアルバムで、こんな写真を見つけました。

この写真が載っているのは昭和2（1927）年3月発行の『十二年会記念写真帖』（F0025/S01/0029）で、大正12（1923）年に医学部に入学した学生の卒業アルバムです。キャプションは「判官を圍んで　辨慶 忠次 お俊……等、等、々」とあり、続く別の写真のキャプションには「新入生歡迎宴遊會」とあります。

めずらしい被写体のこの1枚。その拵えから、左端の男女は、商家の若主人と遊女の心中を劇化した「近頃河原の達引」の伝兵衛とお俊。後列左から富樫左衛門と武蔵坊弁慶、前列右2人目から3人は金剛杖（山伏など修験者が持つ白木の杖）を持っているので義経の家来と思われ、これは有名な「勧進帳」。前列右端で提灯を持っているのは「仮名手本忠臣蔵」五段目の与市兵衛。弁慶の隣は、国定忠次と悪党の山形屋藤造でしょうか。右端には黒子がいます。そうなるとひとつ問題が。キャプションに「判官を圍んで」とありますが、判官義経は何処に……？ 謎は残りますがご愛嬌といたしましょう。

この日のことは大正13年5月23日付の『帝国大学新聞』の記事にあり、5月16日におこなわれた鉄門倶楽部の新入生歓迎会における、2年生の出し物「安宅の新関」と判明しました。どうやら「勧進帳」に当て込んだパロディで、「一藝の心得なき者は此の關通るべからず」と、弁慶、義経家来のみならず、「勧進帳」に全く関係のないお俊や伝兵衛、国定忠次までもが、一挙に安宅の関の関守富樫に通行を止められる、という展開が待っていたようです。記事によれば、「当日の餘興の白眉」で、「富樫と云ひ辨慶と云ひ、舞臺で見得を切るあたり、本職そつちのけ」の出来栄えだった由。中でも富樫役の姿の良さは、当時一世を風靡した十五代目市村羽左衛門さながらと言えましょう。

（学術支援職員・星野厚子）

東京大学文書館

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル（一部省略している場合があります）
11月12日	本部広報課	令和元年度文化勲章受章
11月13日	本部社会連携推進課	SHIBUYA QWS オープニングイベント企画『五神 真総長―隈 研吾教授 対談「地域の未来を拓く知の創発とは？」』開催
11月14日	教育学研究科・教育学部	教育学研究科・教育学部：長野県木島平村との交流についての報告
11月14日	農学生命科学研究科・農学部	農学国際専攻の八木信行教授が、2019 年度カンボジア王国友好勲章を受賞
11月18日	先端科学技術研究センター	藤田敏郎名誉教授が第 56 回 Homer W. Smith Award を受賞
11月19日	本部広報課	令和元年秋の紫綬褒章受章
11月19日	医科学研究所	「第 26 回東アジアシンポジウム」参加報告
11月19日～12月3日	本部広報課	人工知能と社会の関係を考える「AI と社会の総合診療医」＝ 江間有沙｜エスノグラフィーで描き出す在日ロシア人女性の人生模様 ＝ゴロウィナ・クセーニヤ｜東大系卓越研究者 30 代経歴クイズ ／「淡青」39 号特集「UTokyo 30s」より
11月20日	本部入試課	令和 2 年度東京大学入学者募集要項の記載事項の変更 (募集人員）について
11月21日	附属図書館	教養学部国文・漢文学部会所蔵「黒木文庫」のリニューアル公開について
11月21日	史料編纂所	国際研究集会 「近代修史事業と史料集編纂の150年」を開催
11月22日	総合文化研究科・教養学部	考え方の「こり」をほぐして症状改善　統合失調症に対するメタ認知トレーニングの効果
11月22日	理学系研究科・理学部	小石川植物園新温室完成記念式典報告
11月25日	薬学系研究科・薬学部	抗不整脈活性を有するタラチサミンの全合成に成功
11月26日	医学部附属病院	急性下部消化管出血、緊急内視鏡検査の有用性について驚くべき結果が判明
11月26日	薬学系研究科・薬学部	薬学系研究科 教授、大学院生らの共同研究がウッドデザイン賞優秀賞を受賞
11月26日	附属図書館	東大アーカイブズポータルとジャパンサーチの連携開始
11月27日	大気海洋研究所	海洋の内部波によるサンゴ礁の冷却　白化緩和効果の可能性を指摘
11月27日	本部総務課	令和2年度 入学式について（予告）
11月27日	本部社会連携推進課	東京大学・TSMC先進半導体アライアンス共同記者発表会
11月29日	本部入試課	2021年度東京大学入学者選抜（一般入試）における出願要件に関する予告の変更について
12月2日	本部広報課	広報センター冬期休館日のお知らせ
12月2日	本部広報課、農学生命科学研究科・農学部	東大生、牧場を駆け回る
12月3日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催
12月5日	教育学部附属中等教育学校	教育学部附属中等教育学校で宮園浩平副学長による特別授業が行われました
12月5日	医学部附属病院	腰痛の原因になる腰部癒着性くも膜炎のMRIを用いた新しい診断アプローチ

CLOSE UP

研究集会「近代修史事業と史料集編纂の150年」を開催（史料編纂所）

研究集会後のレセプションは、史料編纂所がかつて使用していた赤門書庫を改修した伊藤国際学術研究センターのファカルティクラブで行われました

11月8日、国際研究集会「近代修史事業と史料集編纂の150年」を福武ホールの史料編纂所大会議室にて開催しました。1869年、維新政府により史料編輯国史校正局が設置され、「明治天皇宸翰御沙汰書」が出されたことが近代修史事業の出発点となり、現在の史料編纂所に至ります。150周年を機に、近代修史事業研究の第一人者であるマーガレット・メール氏 (コペンハーゲン大学准教授)と、メール氏の著書『歴史と国家』(東京大学出版会）の共訳者である千葉功氏（学習院大学教授）を招聘しました。

まず、メール氏から「修史・漢学・国家：古典的学問と国家的学問のあいだ」と題する講演が、次いで千葉氏から「史料編纂事業への転回―久米事件と南北朝正閏問題―」と題する講演がなされました。また、史料編纂所の箱石大准教授から「明治太政官文書研究からみた「宸翰御沙汰書」」、井上聡准教授からは「所史資料調査の現状と展望―本所所蔵『往復』を中心に―」と題する報告がなされました。当日は外国人研究者や大学院生、編集者など幅広い層から90名弱が来場し、盛況となりました。

CLOSE UP

宮園浩平理事・副学長による特別授業を開催

（教育学部附属中等教育学校）

授業を行う宮園先生

11月29日、教育学部附属中等教育学校において、本学理事・副学長、医学系研究科分子病理学分野教授、宮園浩平先生による特別授業「がんとはなにか？」が開催されました。生徒・保護者・教員の合計163名が参加し、がん研究の最先端のお話をうかがいました。

遺伝子が傷つくことで発生するがんと、それを阻止しようとするからだの働き、最新のがん治療法である「免疫チェックポイント療法」について等、極めて専門的な内容も含まれていましたが、中学生にも理解しやすいようにお話しくださいました。お話の後には、参加者から、宮園先生ご自身も驚かれるほどの多くの本質をとらえた質問が出され、先生のお話に引き込まれ、強い関心をもって聞いていたことがうかがえました。

CLOSE UP

小石川植物園の新温室完成式典を開催

（理学系研究科・理学部）

完成した新温室。「小石川の温室 いま・むかし」展は柴田記念館で1月31日まで開催しています

11月18日に、理学系研究科附属植物園（通称・小石川植物園）の新温室の完成に伴い、披露式典を開催しました。早朝は雨模様でしたが、式典本番までには空が晴れ渡り、秋晴れのもと開催できたことは大変幸いでした。式典では本学より武田洋幸理学系研究科長、五神真総長、藤井輝夫理事が挨拶を述べ、本園前園長の邑田仁名誉教授が工事の経緯を説明しました。学外からは文化庁の伊藤史恵文化資源活用課長、東京都教育庁の太田誠一地域教育支援部長、そして成澤廣修文京区長から祝辞をいただきました。

式典に引き続き、学内関係者、また新温室完成に向けてこれまでご寄付を続けてこられた約200名の方々を対象にした、新温室の特別内覧会を行ないました。以前の温室に比べ床面積が4倍になり、天井の高さも格段に高くなったため、ゆったりと植物園の誇るコレクションを見ていただけたと思います。特に本園の川北篤教授の発案による「植物と昆虫との絶対共生の展示計画」の解説には、内覧会の間中、多くの方々が引きつけられておりました。

小石川植物園の温室は、さらなる展示・解説のサービスを拡充する予定です。また、園内の柴田記念館では「小石川の温室 いま・むかし」のミニ企画展を開催しています。皆様もどうぞお越しください。

CLOSE UP

TSMCとの先進半導体アライアンスを発表

（本部社会連携推進課）

左から黒田 工学系研究科d.labセンター長、藤井 理事・副学長、五神総長、リュー チェアマン、ウォン副社長、小野寺 TSMC Japan社長

東京大学と、台湾セミコンダクター・マニュファクチャリング・カンパニー（TSMC）は、知識集約型社会を支えるデータ駆動型システムのデザインと製造を追究するため、半導体技術の共同研究を世界に先駆けて全学・全社レベルで行うことになり、11月27日に共同記者発表会を実施しました。

10月1日に開設した工学系研究科附属システムデザイン研究センター（略称ディーラボ（d.lab））において産学連携で設計したチップを TSMC の先進プロセスで試作するとともに、未来のコンピュータに求められる半導体技術を共同で研究します。デジタル技術で一人一人が輝く時代(digital inclusion)に、データ(data)を起点にソフトからデバイス(device)まで一貫して、領域特化型(domain specific)のシステムをデザイン(design) する研究体制を整えました。d.labのチップ設計の工程にTSMCのオープン・イノベーション・プラットフォームを構築する一方、TSMCは複数のプロジェクトを1枚のウェハーにまとめた試作サービスを提供し、d.labのチップ試作を先進プロセスで行います。

東京大学とTSMCは、本アライアンスの成果とd.labの設計手法を組み合わせることで、半導体産業界における領域特化型専用チップの開発と Society 5.0 の実現に貢献します。

CLOSE UP

五神総長と隈研吾教授の対談を渋谷で実施

（本部社会連携推進課）

本学学生・一般の方など、約180名が二人の対談に耳を傾けました

11月8日、渋谷スクランブルスクエア15階SHIBUYA QWSにおいて、『五神真総長―隈研吾教授対談「地域の未来を拓く知の創発とは？」』を開催しました。第一部では、渋谷スクランブルスクエアのデザインアーキテクトを担当する隈教授が、「渋谷スクランブルスクエアと渋谷の未来」について、作品事例を交えながら、設計コンセプト、渋谷の可能性等に触れて講演しました。第二部では、五神総長が「東京大学の取組みとSHIBUYA QWSへの期待」として、SINETによるデータ活用の現状の取組みやSDGsに関連した研究を学内外に発信する未来社会協創本部（FSI）の試みを通じて東大がより良い未来社会の実現を目指している旨を述べました。その後、司会を務めた生産技術研究所の野城智也教授が論点を投げかける形で二人の対談を実施。東大も連携協定に基づき参加するSHIBUYA QWSのオープニングに花を添えました。

七徳堂鬼瓦

英国に学ぶ戦略的コミュニケーション

外交政策の意図を正確に伝える、もしくは有利に進めるためには、コミュニケーションをうまく使いこなす必要がある。これを近年は、戦略的コミュニケーションと呼び重要視する国が多いが、元来、これはそんなに簡単なことではない。

そもそも、コミュニケーションが「戦略的」であるとはどういうことだろうか。国家の言説や行動が、国家の目標の優先事項に照らして一貫性のあるメッセージを発しており、国民や世界の支持を得やすいように構築されているということだ。

この分野では最も経験が深く、また、コミュニケーションを有利に展開するための明確な政策と制度を有しているのが英国である。2018年3月に起こったノビチョク事件を例に挙げてみよう。これは、ソールズベリーで、ノビチョク神経剤により元ロシアダブルスパイとその娘が意識不明になり、英国一般市民が一名、巻き添えになり死亡した例である。この時、英国政府は、当初より疑われていたロシアの関与をすぐには公表せず、まず、危機管理を司るコブラ委員会で、法に則る行動と、ルールに基づく国際秩序の強化という方針を決めたのである。まず、刑事手続きと諜報活動により実行犯と神経剤を特定し、さらに化学兵器禁止機関の審査手続きを経て国際機構の信頼性を向上させた。その上で事件の責任の所在を国際社会や国民に対して公開したのである。コミュニケーションにより、英国政府の信頼性を維持し、殺人など国境を超えた違法行為から法の秩序を守ろうとしたのである。

英国では、政策とコミュニケーションとイメージ作りは一体のものとされ、政策決定の過程でコミュニケーションの仕方も同時に考えることが制度上も担保されている。本事件では、政府全体の方針がトップダウンで決められ、コミュニケーションの専門家が政府の政策を支えた。英国政府では政府を挙げて政治コミュニケーションの専門家を育成しており、外務・英連邦省のみでも250名が勤務する。英国の大学も戦略的コミュニケーションの専門プログラムを設立するなど、人材育成に積極的である。

青井千由紀
（公共政策学連携研究部）

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp